２０１９年度（２０１９年３月～２０２０年３月）

私が読んだ新書

２０２０年３月２２日

衣袋 洋一

私が昨年度から、日頃読んできた新書の書評・印象を記述します。興味を持った新書があったら一度手にしてください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・「他人」の壁：養老孟司、名越康文・ＳＢ選書３９７

前年度から引き続き読みました。デジタル型＝仮想世界では得ることができない「関係性」「読み取り」「気付き」等、対面型＝アナログ世界における他との関係である。養老の著者は、気楽に読ませるが、意外と本気に読ませる。

「ＡＩ」は地球規模による厳密な機械的情報処理の権化。そこには国、地域を超えた冷たい関係性と、目的と結果に従った厳格な存在性がある。アナログ世界における会話、対面等による「気づき」、「情緒」、「いい加減さ」の存在は許されない。

以前読んだ、ジャン・ボードリヤール著書の「シミュレーション、シュミリャクール」で、「すでに日本は到達している」と述べていたのが気になる。２０４５年に訪れる「シギュラリティ」（技術的特異点）はすでに日本におとずれており、人間、人間性の崩壊を始めているのではないでしょうか。　次新書を読み付記する。

・「ＡＩ資本主義」は人類を救えるか-文明史から読み解く：中谷　巌・ＮＨＫ出版５７１

本書の「はじめに」を読み、熟知するだけでの価値はある。リベラルアーツ・ＯＳ・自己更新については。

虚構の上に成り立ってきた人間社会と資本主義、グローバリズム！！　建築も同様ではないでしょうか　自国主義、保護主義の真実は！！　人間が創りだした世界は常に不確実性と不安定性を生み出す。

梅棹忠夫（民族学者：文明の生態史観）が唱える遷移(主体と環境の相互干渉の結果、生活様式が変遷すること)とは。

ＡＩがどの方向にたどり着こうとするのか。技術主義の究極！！？？　「脱抑制」（状況に対する反応としての衝撃や感情を抑えることが不可能になった状態）の社会！！

日本において「持続的・・」が「政治」「経済」「産業」中心に回り、「教育」という手段

にたどり着きいているように思える。以前読んだイザヤ・ペンダサンの本の「１００％賛成は嘘」という言葉が思い出される。
持続的という言葉、その内容が「抑制」「成熟」「成熟的社会」「成熟的成長」とは相対立するように思える。停滞、デフレ、抑制イコール「悪」と決めつけ、レッテルを張り、右肩上がりの成長、開発、経済イコール「善」とする傾向は本当に私達が生活する環境、社会、地球にとって良いのであろうか？！

・中空構造日本の深層：河合隼雄・中公新書

前書を読み、気になった著作である（１９９９年1月１８日初版発行：アマゾンで購入）。今から20年前のことであり、当時の状況を知る上でも貴重な知識であり、かつ、世界及び日本の現状と照らし合わせてみる機会を与えてくれている（書物の強さを感じた）。
「重心の喪失と、それに相応して生じた不完全感」といった１９２０年代のユングの問いかけ！！ そして１９７０年代のブーム！！ では今は！！
「現在（出版された１９９９年当時）は、中心を喪失し統合よりも対極による均衡を求める時代である」「中心として捉えるものは、ある種の曖昧さを持つものでなければならない」と述べている。今の状況に当てはめてみよう。ポピュラリズム、大衆迎合、「不安と恐怖」・・・。世界、政治が動かされている。多数決による民主主義と「多様性・ダイバーシティ」・・・。
「日本的包摂」「包摂」を理解する点においても、気がるに読めるが、中身は濃いものであった！？

誤解だらけの人工知能-ディープラーニングの限界と可能性：田中潤・松本健太郎・光文社新書

質問形式で明解に述べており、現在的テーマである「人工知能」「ディープラーニング」等の内容、意味を知るには読む価値があると思います。ある意味での入門書。

お金の流れで読む日本と世界の未来-世界的投資家は予見する：ジム・ロジャース・ＰＨＰ新書

タイトルから、私に一番遠い世界である。が、目次を見、ふと気になった項目があったので購入しました。ある意味の衝動、ひらめきかな。脳内に蓄積されていたデータ＝ひらめき要素とリンクし、自己更新の機会が与えられた。現在的状況を理解し、著者の「歴史に立脚して先を読む」方法に興味があった。

政権奪取輪-強い野党のつくり方：橋下徹・朝日新聞出版社

この著者の本は読んだことはない。好みからすれば「好きではない」、私と正反対とい

う理由である。でも一理あるところは認めざるを得ない・・・。現実、無党派層を反映したポピュリズム、リベラル・保守等への捉え方。弁護士が裁判に勝つための姿勢、手法等の「したたかさ」及び「大阪的」がにじみでている。「儲かりまっか」・・・。でも、自己中心ではない点は見習うべき。

基本は、きちんとした、正確な、隠蔽しない「情報公開」であろう。私と真反対としての著者を知ったことは参考になった。食わず嫌いは駄目ですね。何ら自己更新には役に立たない。

データが語る日本財政の未来：明石順平・インターナショナル新書０３３

政治・政策に隠れている事実、基本的事項等を数値上から知る必要があると思い、多分、通常は購入しない新書を購入した。きついが読み続けよう！！　怖い結論が書かれているあとがきまで！！

何かを知ることができ、若干悲観的になる。「ゆとり教育を受けてきた世代」の中にあって「本質を気付いてくれる人々」に期待したい。

就職氷河期を経験した世代（第３次ベビーブームを創れなかった世代）が真実の声を上げる必要がある。

「やりがいのある仕事」という幻想：森　博嗣・朝日新聞出版

私同様、作者も元教員、いや、数冊しか読んでいないが、森博嗣＝作風が購入させたのかもしれない。他の人ならば購入しなかった。

「就活」「終活」「・・活」が流行だ。でも、何かを失わせているような気がする。私の持論でもあるが、「流行とは、今、流行っていることをしない」と誰かが言っていた。流れに乗らないで、一旦とどまり、自分を見失わず、考えなさいということであろう。他を気にし過ぎて自分を見失わないためにも。やはり自分に素直でありたい。自然でありたい！！

気楽に読めるが底は深かった。一度、読むことを進める！！

日本進化論：落合陽一・ＳＢ新書４５８

彼の著書を読むのは２冊目。流行著者であったので避けていた。最初は興味本位。今回は内容で購入。

彼は「阻んでいる要因」を直接言わず、一般的内容にとどまっている。政治的であり、「大人的」である。根本の話を避けている。だから、現在のジャーナリズム等で取り上げられているのだろう。このような現状であるならば、若干の「リノベーション」は生まれるが、根本の「イノベーション」は生まれない。日本の経済だけではなく、あらゆる分野の「デフレ現象」は解消しないだろう。変化を求めず、現状の安定を求めている限り、かつ、すべての政策が「選挙事業」と絡んでいるかぎり、日本は先には進まず、数値は変化

し、一見上向きのように見えるが、窒息状態である。
「政治」と「技術」を「政策・選挙事業」等の関係で、「ポリテック」・・・?流行させるのが目的！！　以前読んだ新書に書かれていた「公益資本主義者会」が気になる！！
本書の唯一の価値は、「政治的デフレ」の再確認の場であったと言える。若者が現状維持を求め、「怒る」ことを忘れている。現状維持・満足は「後退」を意味する。

内閣情報調査室-公安警察、公安調査室との三巴の闘い：今井　良・幻冬舎新書

情報の闘いはどの政権でも変わらないだろう。現政権の主要政策を見ていると、この本組織はかなりの力をもっていることがうかがえる。つまり、獲得した情報の加工による意図的な情報発信の怖さを感じた。トランプ大統領の「フェイクニュース」が意図的であり、一方的な、都合のよい側面を拡大、ゆがめた情報発信であると分かっていながら、「偽現実」として進捗する怖さと同等のものを感じたということである。
※この新書を読んでいる最中に書店を訪問した時、以前読んだ「脳には妙なクセがある」が書店のトップに陳列されていた。気になり再読。脳というものは、意図的に「変更」可能なものだと感じた。以前は感じなかったものであった。そんな書籍というものはある。これが「脳の・・・・」なのだろうか！！

誰の味方でもありません：古市憲寿・新潮社

落合陽一とは分野を異にする売れっ子「社会学者」である。
「はじめに」を読み、何故「売れっ子」になるかが分かる。「正論」を直球のイノベーションとして扱うのではなく、変化球のリノベーションとして用いている。
若くして大人的！！ 私にはない。まだまだ悟っていないのだろう。いつまでも「餓鬼」かな！！

未来年表　人口減少危機論のウソ：高橋洋一・扶桑社新書２８６

元官僚(財務省)＆統計学専門そして第１次安倍政権当時の補佐官の論理展開。「数字」の世界。現実社会では・・・。マクロ的な数値専門領域に関しては微小な変化として無視している。しかし、現実社会はミクロ的であり、現実の「危機」を唱えている領域に対する解答がない。官僚的展開！！　現政権の数字的、統計処理（操作可能。特に国際法に従って・・・。）による説明の問題点が如実に出ている。
巧みに、数値を現政権サポートの手段として使い分けている点では「優秀な官僚政治」である。アベノミクス「忖度」で嫌だが、マクロ的優先の官僚思考（ミクロな現実生活には無縁思考）には参考にはなった。

文藝春秋２０１９・３月号~ＡＩ無用論：養老孟司

息抜きに、以前購入した本書（芥川賞作品を読むために）を手にする。以前から、作者の医学論から進めて行く「人間論」に興味があり、単著ではなく、対談を何冊か読んできた。読んでみる価値がある。

空き家を生かす―空間資源大国ニッポンの智恵：松村秀一・朝日新書６９５

ちょっと建築的。ちょっと読んでみようかと思って購入。やはり、私は建築から抜けきらないのかもしれない。

またまた寄り道。ふと書棚が気になり、かつて読んだ「子どもの本の新しい読み方」（大月書店・１９８９年発行）を再読。孫の最近の言動が多いに影響している。意外な側面から影響を受けた。老いては…かな。さらに、最近の新書のテーマ、内容に、少々飽きが来たのかもしれない。ここ数年で２００冊以上になるから。何か新鮮味がないのかも。でも人生と同じように「寄り道」は何かの意義がある。

悲観する力：森博嗣・幻冬舎新書５３８

著者の新書は今回で２冊目。あっさりした中にも、逆説的、痛烈な内容を期待しているのかも。長文の「まえがき」を読む限り、前著(やりがいのある仕事・・・)と同じように読めた。「若者」への警告！！　「楽観」への警告！！　アウフヘーベン！！（昔からの私の思考方法、イノベーション）⇒だから君たちを誉めないのです。誉めて育てる教育は「己の現実」を観なくなる(見なくなるではない)、失敗を恐れる、自己創出のチャンスを逃がす！！　「悲観というものは、可能性のパトロールのような思考」、そして最後のほうに書かれている「考え続ける人間になろう」。いい言葉！！

食物はすごい：田中修・中央公論新社刊

動けない植物が生きていくためのエネルギーを自己生成・生産することができ、また、動けないが子孫繁栄、生きていくすべ・術等を持っていることはすごいことだ。このシステム・生成過程をハード、ソフトシステム及び思考過程の何かに取り入れ、置き換えることで、人間社会、環境等に生かすことができないか？！と考えてしまう。

プログラミング教育はいらない―ＧＡＦＡで求められる力とは？：岡嶋裕史・光文社新書

内容を読まず、私と同意見のタイトルでの購入。「情報処理」＝コンピュータ言語にプログラミング処理（コーディング）という時代、私がシステム工学部立ち上げに関わり、環境システム学科の情報関係の機材購入、及び私の情報処理教育（建築設計、建築そのもの）をする際、基本的に考慮したことは、「何が問題で、どんな方法で解決し、いかに表現する」（論理的思考、問題解決能力＆想像力・創造力）かでした。「頭の中はデジタル情報の集積」と考え、いかに「手と鉛筆」というアナログ情報処理技術で、頭脳で処理された「イメージ・画像・文字」等を表現するかを考えていた。ＡＩ等が言われる時代にあっ

ても間違っていないと思っている。自分がかかわっているすべてが、「情報処理＝自分の問題」なのです。

＊同じ著者の「数式を使わないデータマイニング入門―隠れた法則を発見する」があったのを気付き、ザーッと再読する。気づき方が違うことが分かる。新書を読むことは心の「副業」（さおだけ屋はなぜ潰れないのか）であり、だから「心の利益」を生んでいるのかも！！？

読後。３０年近く前にシステム工学部を立ち上げに関わり、移籍したことが「良かった」ことを再認識し、当時日本は存在しなかったカタカナ文字の学部を立ち上げたことは「立派」だった。そこで学び、教えてきたことが新たな自分が構築されたのだと実感した。自己更新をはかるためには、怖いが常に新たな領域を求めないと意味はない。

未来への大分岐―資本主義の終焉か、人間の終焉か：マイケル・ガブリエル、マイケル・ハート、ポール・メイソン・集英社新書

いつもそうであるが、「はじめに」の文章が内容を如実に表している。本書もそうであった。象徴的な文章はＧＡＦＡを引き合いに出し、「要するに、テクノロジーは中立的ものではないのだ。テクノロジーは、知や権力を構造化し、利潤のために世界を再編成する手段だからである」と言っている。衝撃的文章である。大分岐の問題がここに集約しているような気がする。

知らないと恥をかく世界の大問題１０-危機を迎える世界と日本：池上彰・角川新書

流行のタレント評論家、自分の意見をはっきりと述べない評論家の著書は読んでいなかった。しかし、・・・・自己確認のため。ある意味、教科書みたいにサーッと読めた。貴方もどうですか！

著者の気になった言葉に「いわゆる社会がそのものどうなっているかを知ること、これも大切なことです。人間を知る、社会を知ることは、ＡＩには不可能です」があった。倫理（実践哲学）と同じことです。また「意味を理解できるのが人間の優位性だと考えれば、読解力を付けていなければＡＩに負けてしまう可能性が高いのです。先日の新聞にも世界の上位の中で、日本の学生の読解力が低いと報道されていた。人間、社会の「あや」等を読み解くための訓練である「小説」「長文」を読まない弊害が出てきているのだろう。

武器としての交渉思考：瀧本哲史・星海社新書

冒頭から興味深い内容であった。「ディベート」の意味、組織の在り方、発展のしかた等。軽く読める本の中に、現在の閉そく感からの脱出、リノベーション、イノベーションの発見等々に対する多くのヒントが埋もれている。自分が発展、更新するために、各自の「他」との関係で「交渉」するに必要な「何か」に置き換えてみると良いと思った。

理系思考が求める結果のためのエビデンスではなく、人文学的な「モヤモヤ感」「ロマ

ン感」！！　「人文学」！！　著書内容を、自分の「何か」に置き換えて読み込む必要あると感じた新書です。直接的な読み込みでは何の「獲得」にはならない！！
「ロマン」と「ソロバン」⇒「ソロバン」を何に置き換えるか！！？？　意外と今の君に役立つかも！！

文藝春秋オピニオン　２０２０年お論点：文藝春秋

過去、現在の知識、思考、教養等に対する更新を通じて、今後の自分自身のリノベーションを図る。興味のある所から読めばよいので気楽になる。ぜひ自分を試してほしい。

ハーバードの日本人論：佐藤智恵・中公新書ラクレ

以前著者の「ハーバードで一番人気の国・日本」を読んだ。彼らが「日本（人）が持っている良さ」、「日本的」「日本人が忘れている」情報を、「グローバリズム」「資本主義」等に惑わされない内容で発信していた。

近年、日本は惑わされているような気がする。特に最近は。何故、世界は「・・・・・ファースト」なのか、それに至った理由は。焦らず世界の状況と照らし合わせながら、ハーバード大学から見た「日本」を読み、現状を知ってみよう。日本の良さがあるからこそ取り上げている。一番気が付いていないのが「日本」「日本人」かも！！

「外圧」により教えられ、再考しないと「日本」「日本人」は「自分を・・・」駄目なのだろうか・・・。さあ―読んでいこう！！

サブスクリプション：雨宮寛二・角川新書

流行りの言葉。基本的に押さえておく事項だと思い購入。機能利用か付加価値利用か？自分を見つめるためにも！！

ミレニアル世代（１９８０年代から２００年代初頭生まれ）は日本における「ゆとり世代」（１９８７年度から２００３年度初等教育を受けた↓１９８１年度から１９９７年度生まれ）とかぶさる。彼らの世代、価値観が変わったと言われている！！
それが「サブスク」であると言われる。

ＳＤＧｓ入門：村上芽、渡辺珠子・日経文庫

国連からの提案。日本において、ここ数年ブームと言え、国、企業、教育機関等、全てがＳＤＧｓ。何故か？　地球環境問題！！　民主主義・資本主義の限界問題！！　もう遅すぎるのではとも言われている！！

社会の在り方、自分を確認する上でも、興味のある人は読んでください。

ジブリアニメで哲学する―世界の見方が変わる：小川仁志・ＰＨＰ文庫

孫・くるみは同じ本、アニメを何回も見、同じおもちゃ等で遊んでいる。何がそんなに

夢中にさせているのだろうか。一回一回彼女が描く世界が異なり、新鮮な気持ちにさせているのかもしれない。そんな風景を見ている私の気持ちも新鮮になる。常に新たなものを購入消費している大人が失ってしまった、そして味わえない世界が！！

そんな時、新書ではないが気になる文庫を見つけた（２０１７年出版であった。その時目につかなかった！！）。大人目線で「哲学」するのではなく、子供気分で「感じたい」という気持ちで読んでみよう！！　出来るかな？？

「ゆとりある教育」は１９８７年開始、「となりのトトロ」は１９８８年上映・・・。その数年後、バブル崩壊・・・。そして、津波の話が出てくる「崖の上のポニョ」は３・１１の3.年前・・。

久しぶりに無理なく、素直に、爽やかに読むことができた。今年はこの気持ちのまま書評を閉じることにしました。

その他芥川・直木賞作品を含む多数の本、新書、厚い書籍を読んだがカットします。最後まで読んでいただき感謝申し上げます。ありがとう！！